

『楓橋夜泊』 張 繼

旅愁をうたった詩で、古来より

有名であるが解釈にあたっては諸説がある

楓橋夜泊 張 繼

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼いて霜天に滿つ

江楓漁火對愁眠 江楓漁火愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲客船に到る

作者

湖南省襄陽の人で、生没年は詳らかではないが、天寶十二年（七五三）に進士の試験に及第しているから、生まれたのは多分七二〇年代であろうか。博識で鎮戎軍幕府の属官や塩鉄判官などを経て、大暦年間（七六六～七七九）に檢校祠部員外郎の官に就く。この年代からみると、杜甫の亡くなった七七〇年以降も生きていたことになる。

杜甫が江南を彷徨いながら絶望的な望郷の悲哀をうたっていた年間は、美しい郷愁の詩句を生むこのような詩人たちによって、中唐の幕が開かれていたのである。

要旨

秋の夜、楓橋にて船中に一泊し、寂しい自然の中で鐘声を聞いて、しみじみと旅愁を味わった。

意解

月は沈み、鳥の啼き声が聞こえ、冷たい霜の気配が、あたり一面に満ちわたる。岸辺の紅葉した楓と漁火がうつらうつらと眠られぬ目に映る。

（そのとき）蘇州の町はずれにある寒山寺から、夜半を告げる鐘の音が、わが乗る船に聞こえてきた。（旅の夜はことさら長く思われることだ）

鑑賞

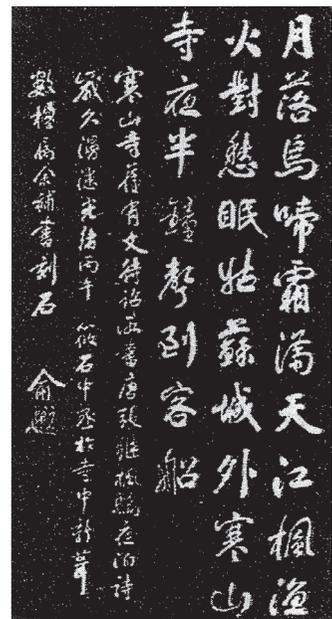
楓橋は、江蘇省蘇州の西方約五キロメートルにある橋で、大運河に通ずる小川に架かる。もとは封橋といったが、張繼の「楓橋夜泊」の詩に因んで楓橋と言われるようになったとか、封橋の辺りに楓が多く見られたことから、同音の楓橋の字が当てられるようになったという。

また、当時では船旅をして、夜になると城門外の運河の岸に船を繋いで夜泊（船どまり）をした。

起句は、月が沈んだ夜景と、冷たく厳しい気配が作者をつつみ、また闇の中を鋭く悲しげな鳥の啼き声が聞こえてくる。視覚と聴覚に鮮明に訴えながら詠み込んだ表現は作者の旅愁をかきたてる大きな効果になって、旅の夜に鋭敏になった作者の孤独な気分を示している。

承句は、前句を受けて、紅葉した楓の赤と暗い川面に漁火が赤く映え、旅の愁いで寝つかれない作者の目に映じている。この二つの赤い色が、月が沈んだ暗闇の黒の中で、この句でも視覚的な効果に訴えている。そして江楓と漁火をじっと見つめていることを「對愁眠」の「對」で表現し、作者をより孤独な気分させている。

転句に出てくる姑蘇は今の水都蘇州で、呉王夫差が姑蘇臺という宮殿を造ったことから姑蘇という名がある。また寒山寺は楓橋の東四〜五百メートルにある寺で、宋代では楓橋寺ともいわれていた。初めは「妙利普明塔院」といわ



の僧で、文殊、普賢の生まれかわりといわれる）留まったことから寒山寺という言い伝えがある。

なお、この寒山寺は戦火などで何度も焼け、現在は清末に再建され、清代の俞樾の筆による「楓橋夜泊」の詩碑がある。また、名詞のみで構成されているこの句は、感情はないにもかかわらず、呉王夫差の都が有った姑蘇の古跡と、姑蘇城外の「外」や、寒山寺の「寒」の字などから引き出される旅愁を、しみじみと伝える大きな効果となっている。

結句の「夜半鐘」については、宋の歐陽修が「夜中には鐘を打たないものだ」と批判をしたが、その後、夜半に鐘が鳴ったとうたった作例が多くあるという反論が出た。

このような議論が出たことで、この詩は非常に有名になった。

れており、唐の貞観年間（六二七〜六四九）に、寒山とそ

の弟子の拾得（唐

諸説・探求

前記の鑑賞と重複するが、もう少し探ってみよう。

蘇州には、半夜鐘という鐘が有ったとか、その町の寺々の中では承天寺だけが半夜に鳴らし、他の寺は五更に鳴らしたとかいわれ、「烏啼」は烏啼山のことか、烏啼橋という説とか諸説がある。要は起句と結句が暁のことか、もしくは夜半のことかがこの詩の解釈のポイントになったようだ。諸種の研究書に見える説を利用させていただくと。

まず起句は、暁に近い情景とすることは可能で、月が沈む時刻は明け方に近いことを示すのが普通であろう。また、この月が上弦の月か、下弦の月か、もしくは満月かによって時刻が異なるといえば、この詩にそれを判定させる決めに手になるものはない。

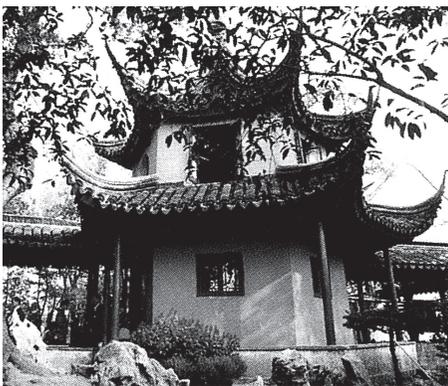
また、烏が啼くのはいつか。たとえば李白の「黄雲城辺烏棲まんと欲し帰り飛んで啞啞と枝上に啼く」（烏夜啼）は夕暮れに寝ぐらに帰ろうとして啼く烏。楊巨源の「城頭夜半声啞啞たり」（烏夜啼）は真夜中に啼く烏。陳後主の「烏啼き漢没し、天応に曙けん」とす」（棲烏曲）は暁の烏。というように烏はいつでも啼いている。

烏が夜に啼くのは吉兆がある前触れであるとする言い伝えが中国にはあるようだが、詩の烏は別れた人と思うときのように、悲哀をそそるものとしてうたわれる場合が多い。

次の「霜满天」これはいつか。古来中国では、霜は天から降るものと考えられており、「淮南子」という書物には、青女という天の神が霜雪を司ると見える。天上から降りてきた霜が、地上におりしく前に、空中に冷ややかな気配を満ちたらせている。それを肌感じたとすれば、どうやら夜明けに近いとおもわれるが、これも短い時間の中に限定する決め手はない。このように見ると起句の解釈によって夜中とみるか、夜明けとみるか、諸説の出でるところである。

結句の解釈はどうか。前記した歐陽修の指摘とは違って、胡仔が例証とした、作者の親友の皇甫冉の「秋夜嚴維宅に宿すの詩」に（秋深くして水に臨む月、夜半に山を隔つる鐘）の詩的真實によって真夜中の鐘であるという説を有力視したい。

月は沈み、烏が啼いて霜の降る気配を感じて、浅いまどろみから覚め、もう夜が明けたかと錯覚したのであろう。そこで江楓や漁火が目映り、そこへ姑蘇城外の寒山寺から夜半を告げる鐘の音が聞こえてきて、今はま



寒山寺

だ夜中であったのかと再び旅愁のわびしさが言外に余情をもつてひびいてくる。と解釈については可能な限り発掘を試みたつもりですが、どのようにご判断されるでしょうか。今回の詩においても、先学からの有益な啓発を受けつつ、詩趣が私たちの心に浸みこんでくれば、これも唐詩の世界を説き明かすロマンではないでしょうか。